

# 雌島燈台と松



**雌島・雄島**  
七尾南湾に浮かぶ雌島と雄島。

この二つの小島は、多くの貴重な植物種が生息している（雌島に約90種、雄島に10種余）ことで、平成2年に市指定記念物（天然記念物）に指定された。現在、植物の採集が禁止となっており、保護されている。

雌島と雄島は、湾内では珍しく溶岩でできた島である。



雄島

そのため、雄島には表面を被う土がなく、面積が小さいこともあり、原生植生地として自然のままに放置されてきた。

一方、雌島には一部に土に被われている場所もあり、雄島より、多くの植生がある。また、雌島に数倍する面積もあり、古くは弁財天を祀る社も作られていた。（この社は風雨により損壊し、さらに、祭事に不便なこともあって海門寺（大田町）に遷（うつ）されている。）

また、昭和27年には、雌島燈台（建設当時は雌島燈標、平成元年に雌島燈台となる）が建設され、燈台を管理するための船着き場が設けられ、コンクリートの道が燈台へと延びている。

## 雌島燈台

赤い色が特徴的な雌島燈台に近づいてみると、燈台の壁面は、赤色に塗ったものではなく、壁面全体に赤いモザイクタイルを張ったものであることが解る。周囲に何も無い小島であるため、風雨に強いモザイクタイルを使ったのであろう。

燈台の赤は、青い海と空にとってもよく映える。さらに、燈台に寄り添うように生える



雌島燈台の壁面

松の木の緑が見事に調和して、すばらしい景観を作り出している。

## 雌島の松

この松（クロマツ）は、燈台が作られるより前に人の手によって植えられたものである。航行する船舶の目印となるようにと植えられたものであるのか。

この木が植えられた正確な時期は解らないが、おそらく百年近く前であろうと聞いた。確かに養分も真水もわずかしかなない場所に高さ3メー



トル、幅5メートル以上に枝葉を広げている姿は、相当な年数を経たものであろう。わずかな岩の割れ目にしっかりと根を張っている。

木の幅に比べ丈が低いのは、風の影響であろう。この島の木は、ほとんどが地を這うように生えている。

海に浮かぶ小島には風をさえぎるものがほとんどなく、この松も、かつての台風による強風で、大きな枝が折れて無くなった。

この折れた枝は、現在生えている枝とは逆の方向にあったため、当時は今以上に見事な枝振りを見せていたにちがいない。

現在、生えている枝も、幾度となく折れたのであろう、大きな枝になるほどカクカクと曲がりくねっている。そのことで、枝振りがまるで盆栽のようになっている。

養分、真水が少なく、風が強いという悪条件の中、雌島でただ一箇所しかない松の育つことのできる場所を選び植えた人は、今日の姿を思い浮かべていたのであろうか。

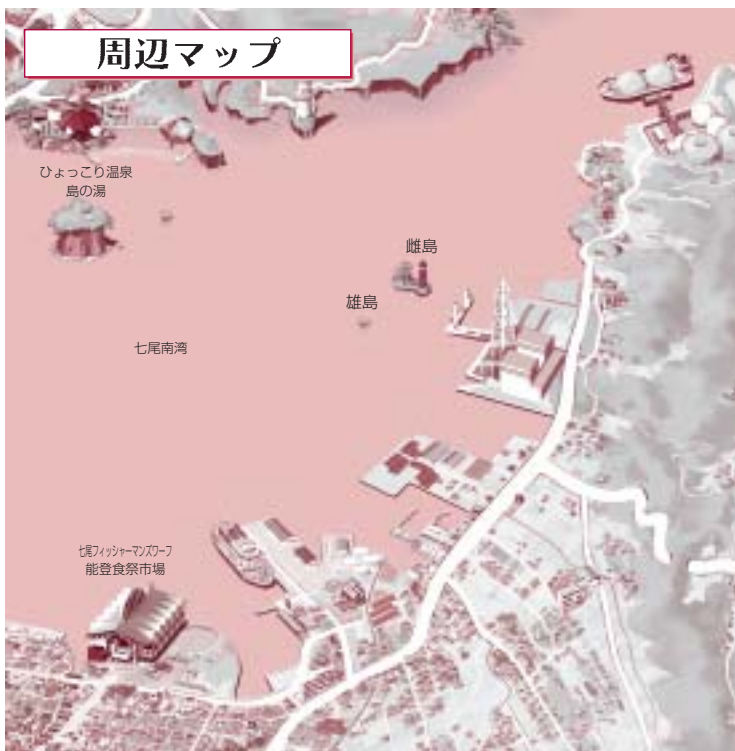
悪条件にもかかわらず、長い年月を経て育つ松には、強い生命力を感じる。

近年、多くの松の古木が、輸入木材から発生したといわれているマツクイムシの被害により、姿を消している。

雌島の松は、周囲が海であり、人の手がほとんど入らない離島に植えられたことで、その被害から今日まで守られているのであろう。

人の手によって植えられた雌島の松は、自然の力に守られ、自然の力に負けずに育っている。

この松を、燈台とともに雌島のシンボルとして、いつま



雌島の松

でもその勇姿が見られるように、大切に見守っていきたいものである。